朝鮮三国時代の弥勒浄土磨崖像

毛利　久

一、朝鮮三国時代の弥勒信仰と造像

弥勒と称するものには菩薩と如来の二つが含まれている。弥勒菩薩は現在兜率天に住んで修業にはげんでいるが、遠い未来、釈尊入滅後五十六億七千万年に達すると、人間世界の閻浮提に降下して、龍華樹下で仏として三度の説法を行い、人々を救済する。前者を兜率上生、後者を弥勒下生といい、このような二つの性格が弥勒を菩薩と如来とに分けることにもなる。

三国時代における弥勒信仰はあまり明確でない。ただ中国では北魏時代を中心として弥勒信仰は釈迦信仰に次いで隆盛であったので、三国でも同様な風潮であったと推察することはできよう。若干の事例を拾えば、高句麗平原王一三年（五七一）に比定される「景四年辛卯」の造像銘を有する銅造阿弥陀三尊立像は、無量寿像をつくることによって亡師父母が弥勒に値遇することを願うもので、当時における素朴な弥勒信仰の実態が察せられる。敏達天皇一三年（五八四）に鹿深臣が弥勒石像一軀を百済からもたらしたことは著名な事実であり、また益山に壮大な遺跡のある弥勒寺も百済時代のものである。それにしても、とくに新羅において弥勒と花郎の結びつきが顕著であったことは特筆すべきであろう。新羅六世紀中頃の真興王時代に成立した戦士的な青年貴族の集団を花郎と呼んだが、彼等は団結のあかしに弥勒の下生信仰を採用し、花郎は弥勒の化身とまでいわれるようになった。新羅国家の発展とともに、このような花郎を通じて弥勒信仰が全土に広まって行ったことは十分考えられるところである。

弥勒信仰を背景として弥勒像の造立が盛んであったことは当然であるが、ではどのような像がつくられたのであろうか。その場合考えられることは二つある。第一は蓮花寺の戊寅年（新羅文武王一八年（六七八））銘四面石像[1]のように半跏思惟像としてあらわしたもので、これはいうまでもなく菩薩形である。第二は慶州南山三花嶺出土の石像[2]のように如来倚像としてつくったものである。如来形にはその他一般的な坐像および立像の場合もあることはいうまでもない。これらのうちで遺存する数が多く、形相でも特色のあるものは半跏思惟像であることに異論なかろう。

ここで中国の場合を考えてみると、南北朝時代には菩薩交脚像を弥勒と称することが多く、また半跏思惟形の菩薩像を弥勒に当てることもあった。さらに隋・唐の間になると、弥勒如来を倚像としてあらわすことが少なくなかった。その点で中国と三国とを比較すると、三国では交脚像の作例がほとんどなく、また倚像をもって弥勒をあらわす例も少ない。三国において弥勒菩薩としてつくられたのは半跏思惟像が最も多かったと見るべきで、ここに中国と三国との大きな違いがある。では日本ではどうかといえば、三国の場合とほぼ似通っていたと考えられる。おそらく半跏思惟像の親しみやすく優美な形相が、三国時代の人々と同様、日本人の心をも深くとらえたのであろうか。ただここで念を押しておきたいのは、三国でも日本でも半跏思惟像のすべてが弥勒であるというのではなく、その他、悉達太子（後の釈迦）像にもこの姿のものがあり、また特定の尊名をつけない、いわば厳飾的な性格の半跏思惟像もあったことである。

このように、半跏思惟像にはかなり複雑な要素も含まれるのであるが、本稿では、三国引いては日本の半跏思惟像の本質を知るために、一つの推論を立ててみた。取扱う対象は、半跏思惟像を群像のなかにあらわす三国時代の磨崖像三つであり、主として図像学的な方法を用いたアプローチによって弥勒浄土美術の一面に触れてみたい。(3)

二、月城磨崖像

この磨崖像は慶尚北道月城郡西面にあり、断石山神仙寺磨崖像あるいは上人巌と呼ばれることもある。一九六九年から東国大学校教授黄寿永氏によって本格的な調査研究が行われ、その学問的な価値が次第に認識されるに至ったことは喜ばしい限りである。

磨崖像のある現地は、海抜約七〇〇メートルの山中で、そこに到達するためには、険阻な山道を喘ぎながら登って行かねばならない。私が九州大学教授田村圓澄氏・奈良国立博物館考古室長稲垣晋也氏といっしょにこの苦行を果たしたのは、一九七六年九月一五日のことであった。いま黄氏の研究成果(4)を主な拠所とし、それに私たちの現地におけるわずかな知見を加えて、この月城磨崖像の概要を記してみたい。

断石山頂の真下に、四つの天然の巨岩がコの字形に立っている。すなわち、北側に東西に並ぶ二石、東側と南側にそれぞれ一石が立ち、西側には石が見当らず開かれている。四石によって取囲まれた空間は長方形の石室（縦約一八メートル、横約三メートル）を形成しており、問題とする磨崖像はこの内部岩面に刻まれている。石室への出入は開かれた西側からであったと見てよい。なお石室周辺の発掘調査によれば、四岩の上に木造瓦葺きの屋蓋があったことが判明したのは特記すべきであろう。

この長方形の石室は、西側から見れば前室と後室とに分けて諸像を

彫出していることが知られる。

後室は、東寄りの北石、東石、南石の三岩から成る。まず北石には南面する巨大な如来立像（総高約六メートル）を肉厚に彫る。通肩の法衣を着けて直立し、左手与願、右手施無畏の印を示す。顔はまるく、素朴である。次に東石には西面する菩薩立像（総高約三メートル）を彫出する。左手を胸に近付け、右手に宝瓶を持つ。南石には北面する菩薩立像（総高約二メートル）を彫るが、磨滅するのは惜しい。両手は前像の左右を反対にしたような格好になるが、宝瓶は持っていない。

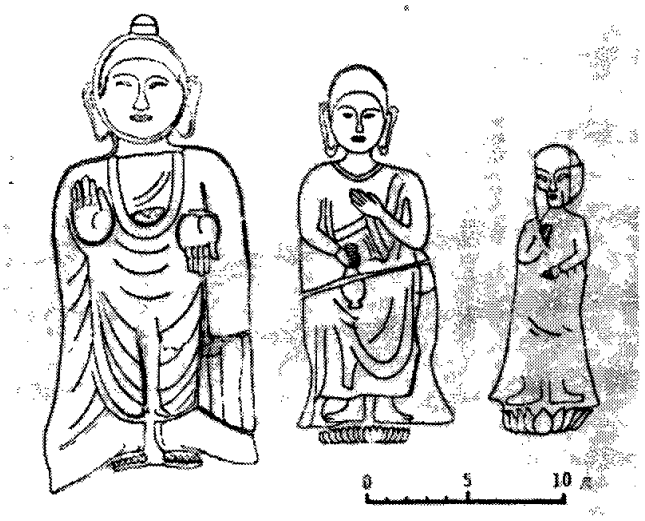

図 1　月域磨崖像図（後室）

この菩薩立像の右側に、毎行一九字、二〇行にも及ぶ銘文が刻まれている。長い年月の経過による磨損のために判読できない文字も多いが、それにしても「慶州上人巌造像銘記」と題し、伽藍を創建して神仙寺と名づけ、「弥勒石像一区高三丈菩薩二区」をつくったことが明記されている。寺名の神仙は弥勒仙花の意であり、弥勒を本尊としていたことは疑いない。事実、上記の弥勒三尊像をつくったというのは、まさしくこの寺の本尊をいうものであろう。そして、後室の巨大な如来立像と二軀の菩薩立像がこれに当ることも首肯できるところである。

次に前室に移って述べてみよう。ここでは南面する西寄りの北石に

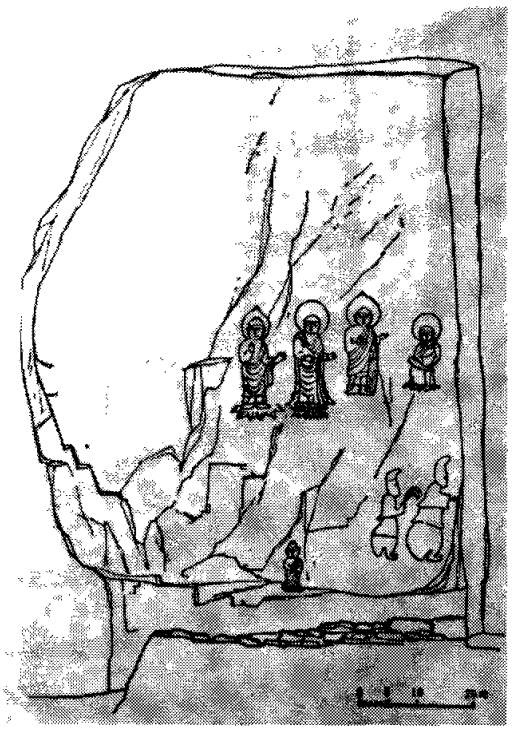

図 2　月域磨崖像図（前室）

七体の像を上下二段に分けて刻出する。上段には四体が横一列に並んでいる。東から西へと見るに、まず第一に左脚踏下げの半跏思惟像（総高一・一〇メートル）がほぼ正面向きに刻まれる。次は如来立像（総高一・一六メートル）で、偏袒右肩の法衣を着し、正面向きに両手を屈臂するが、とくに左手は後室の方を指しているように見えるのは注目される。次は両肩に天衣をかけた菩薩立像（総高一・〇二メートル）、さらにその次は偏袒右肩の如来立像（総高一・〇六メートル）であり、ともに正面を向き、左手で後室の方向を指している点は上記如来立像に近似する。

図 3　月域磨崖像（右端半跏思惟像）

前室の上掲四像の下段に、なお三体の像が彫刻されている。すなわち上段の半跏思惟像の下方に俗体の男子立像二体がある。ともに烏帽子のような冠をかぶり、着服は上下に分かれ、下方の袴は大きくふくらむ。見逃せないのは、二体とも後室の方へ向く側面像としてあらわし、しかも手に何か供物らしいものを持ち、やや大きい像（高さ一・二三メートル）が前に、他が従者のようにその後に侍る点である。最後の一体は、この北石の最下方中ほどに刻出する小さい如来立像（総高〇・五八メートル）で、偏袒右肩、正面を向く。

さて上記の前室磨崖像七体を全体的に見ると、それらは無作意に彫刻されたものとは到底考えられない。とくに上段の如来像二体と菩薩像一体がいずれも後室の方へ招じるように左手を指している点、あるいは下段の俗体男子二人が供物のようなものを捧げて、うやうやしく後室の方向へ歩む姿などから推察すれば、これは明らかに後室の本尊である弥勒三尊像を意識し、それに対応するものといわねばならない。

ところで、ここでもう一つ重要なことは、半跏思惟像が上段の後室寄りにあらわされている点である。いうまでもなく、半跏思惟像は兜率天で上生修業中の弥勒菩薩をあらわすことが多い。これに対して、

後室の主尊となる弥勒はすでに下生して人間救済に当る如来であり、同じ弥勒といっても、性格・形相に大きな差違がある。その点からいえば、後室に巨大な弥勒如来立像が出現する手前に、半跏思惟形の弥勒菩薩像をあらわしているのは理にかなったことである。なおまた、仏菩薩や信者などが、弥勒下生の龍華三会へ向ってひたすら祈念しているのも、よく理解できる。前室において、仏菩薩が後室の方向を指したり、俗体男子がおそらく後室の弥勒三尊像に向って供養するのを見れば、磨崖像参拝者の足も自ずから後室へと運ばれるに違いない。がんらい仏教において説明的な図絵構成は仏伝図、仏伝彫刻などにおいて多用されたもので、この磨崖像もその系統と無縁なものとはいえないであろう。

これを要するに、月城磨崖像は、前室に釈迦滅後五十六億七千万年の間、兜率天に上生修業する弥勒菩薩と、その弥勒が閻浮提に下生して行う龍華三会の説法に一日も早く値遇しようと熱望する仏菩薩をはじめとして衆生に至る人々の姿をあらわす。これを受けて、後室は人間世界としての閻浮提に舞台が変り、そこに下生した弥勒如来と両脇侍菩薩が、見るからに頼もしい巨大な姿で化度の説法を行うところとなる。まさしく、弥勒の上生と下生を背景とする荘大なドラマが、わずか計一〇像に集約して彫刻された磨崖像といわねばならない。換言すれば、以上に述べて来たような有機的相関関係を持つ、いわば弥勒浄土磨崖像であった、と私は考えるのである。

ではこの磨崖像の製作年代はどうであろうか。黄寿永氏はこれについて「この半跏像は、正面観を堅持しつつ彫法と各部の様式が古拙で、単調ながらも相好と両手指の表現や、半跏形式と蓮花座の様式から見て、新羅の作品としては、その年代が最も高古であることがわかる。」と述べ、古新羅末期の六〇〇年頃に造成されたことを推定されている。(5) 私も六世紀後半ないしは七世紀初めとするのが妥当な見解と考えるものである。この山中を新羅の名将金庾信の練武の遺跡と伝えて、断石山と呼んでいるのも、年代的に矛盾しない点から一考する価値があるかもしれない。

三、中原磨崖像

一九七八年、檀国大学校教授鄭永鎬氏その他の人々によって発見調査された中原磨崖像は、忠清北道中原郡可金面鳳凰里の仏肩山中腹に遺存するものである。(6) 幸い田村圓澄氏と私は、翌一九七九年四月五日に、黄寿永・鄭永鎬両氏の案内をいただいてこの磨崖像を実査することができた。道もないような崖をよじ登って磨崖像の前に出ると、東面する眼下に視野が広がり、南漢江の流れが望見される。眺望絶佳と称してよい場所である。

磨崖像は左右二群に分かれている。まず向って右の方から述べれば、ここには六体の像が彫出されている。そのなかで主尊となるものは、

いちばん大きく高くあらわされた半跏思惟像と見て差支えなかろう。すなわち総高一・二〇メートルの正面向きの菩薩像であり、左足を踏下げ、右足を曲げてその足首に左手を添え、右手の指を頬に近付ける姿となる。なお足下には有茎の蓮華座が見られるようだが、他の菩薩立像もこれに類するものであろうか（ただし、上半身のみをあらわす一体については不詳）。

図 4　中原磨崖像（右側の拓本）

半跏思惟像に従う五体の菩薩立像を、向って右の方から見て行くことにしよう。まず最初は半跏思惟像の向って右に立ち、主尊の肩あたりまでの菩薩像で、右手に花を持つ。主尊の次に上半身を見せる像は、手前の像のため下がかくれ、手付なども不明である。その上、体形がやや小さく、位置が上方になっていることから推しても、多少の遠近感を意識した表現であろうか。その前方には少し大きく三体の菩薩像が横に立ち並ぶ。上記最初の菩薩像と同じくらいの大きさであり、向って右から、手付不明の像、垂下する右手に何かを持つ像、両手を屈臂して左手に宝珠、右手に花を持つ像を刻出している。これらは、主

図 5　倶舎曼荼羅図

尊を取巻く諸菩薩を示そうとしたとも見られる。

以上が向って右の岩面に彫刻された六体の像すべてであるが、この群像が何をあらわしているかは、さまでむつかしい問題ではなかろう。群像の中心となるのが半跏思惟像であり、他の五体の菩薩立像がこれを讃仰して取巻く様子をあらわすものとすれば、古風を伝える囲遶形式の諸像安置法をとっているとも解される。この形式の群像はすでに唐土において行われたもので、例えば敦煌石窟や龍門・天龍山などの石窟寺院にその例があり、また朝鮮においても仏国寺石窟庵の場合がそれである。これは中央の釈迦如来像を取囲むように十大弟子や諸菩薩・諸天などの像を彫刻している。日本では奈良時代に盛行したようであり、興福寺西金堂の安置仏像が釈迦如来像を中心として囲遶するものであったことは、古記録や古図などによって明らかである。そのほか、法隆寺金堂壁画・勧修寺釈迦説法図繡帳・東大寺倶舎曼荼羅図などにも囲遶形式の諸像を見ることができる。(7) 問題とする中原磨崖像も、数が少なくて比較的簡略な群像表現ではあるが、上生時代の弥勒菩薩半跏思惟像を囲遶する諸菩薩が讃仰し、ひたすら龍華三会を欣求する有様をあらわしたものと解することができよう。

図 6　中原磨崖像（左側の拓本）

次に向って左方の磨崖像に眼を移すことにする。こちらの方は前者よりも岩面小さく、そこに彫られた像も二体にすぎない。まず向って右の如来坐像は高さ〇・八三メートル（ただし下部欠損）で、通肩の法衣をつけ、左手与願印、右手施無畏印を示す正面向きの像である。その向って左側に小さい供養菩薩像が刻出される。すなわち如来像の方へ向く側面像で、右膝をつき、左膝を立て、両手で花らしいものを捧げる。右腰に環を通した飾帯が長く垂れているのが印象的である。

この二体の像があらわすものは、これだけでは解釈しにくいが、上記の半跏思惟像の一群と結びつけて考えれば、おのずから分かって来

るのではなかろうか。すなわち、前の群像が上生時代の弥勒と諸菩薩をあらわすとすれば、これは下生成道を達した後の弥勒とその供養讃仰菩薩を象徴的に刻んだものと解するのが、いちばん自然であるといえよう。左右両岩の像は別々のものでなく、本来密接不離の関係にあることを認識すべきである。さきに述べた月城磨崖像においても、前室と後室との間に同様の関係があったことを、ここに改めて想起しなければならない。なお日本の場合でも、興福寺中金堂のなかには、下生相（養老五年〔七二一〕藤原不比等の一周忌に造立）と上生相（下生相より後のものだが、縁起は明らかでない）の二種の弥勒浄土変像が安置されていた例がある。(8) このように、上生像と下生像を一具として考えることは、むしろ当時の一般的な通念であったのではなかろうか。このような考え方を背景として、月城や中原の磨崖像もできあがったのであろう。

中原磨崖像の製作期は三国時代六〇〇年あたりに考えられている。がんらいこの地域は高句麗・百済・新羅の勢力が入り乱れたところであって、仏像なども国別に分けることがむつかしい。この磨崖像も同様のものであるが、ただ弥勒如来坐像の面容を見ると、楕円形の顔で、鼻が細く、両眼が横に延びるなどの特色に、ソウル郊外の三陽洞から発見された銅造観音菩薩立像のそれに近いものを感じる。この像は古新羅風といわれることを参考までに記しておく。

四、瑞山磨崖像

これまでに述べて来た月城と中原の弥勒浄土磨崖像は、それぞれ上生相と下生相とが緊密な関係で表現されていたことに共通するものがあった。ところが、同じく弥勒浄土磨崖像と見られるにもかかわらず、若干趣きを異にするものが百済の地にのこっている。すなわち、忠清南道瑞山郡雲山面龍賢里にある磨崖像で、俗に印岩と呼ばれているものである。

この磨崖像は道路から少し入った岩山に南南東向きに彫られ、すでに早くから存在は知られていたが、専門家によって注目されるようになったのは一九五九年頃からであった。とくに国立博物館長金載元氏と黄寿永氏によって現地調査が行われ、その概報が発表されてから、(9) 多くの人々の関心を集め、すぐれた作域が高く評価されるようになった。なおまた、そこに彫刻された特殊な三尊形式をどのように理解するか、提起される問題は少なくないようである。私が田村圓澄・北野耕平（神戸商船大学教授）両氏と共に瑞山磨崖像を実査したのは一九七五年一〇月四日のことであった。

さて瑞山磨崖像の図相は、中央に如来立像を大きく刻出し、左に菩薩半跏思惟像、右に菩薩立像をそれぞれやや小さくあらわしている。後者の両像は形姿こそ異なるが、脇侍的な位置にあると見るのが妥当であろう。

図 7　瑞山磨崖像

まず中央の如来像から述べて行こう。総高二・〇八メートル、通肩の大衣を着け、左右両臂を屈し、左手は第一・二・三指を伸ばし、他の二指を曲げ、右手は全指を伸ばし、正面を向いて反花座の上に立つ。頭部の後には宝珠形の光背が刻まれる。これは円形内区に蓮花、外区には火焔をあらわし、その上部に三体の化仏が配される。衣文などからも分かるように、左右相称風のところも残るが、顔はまるく、眼を大きく見開いて、口もとに微笑をたたえる。このような大きな眼は中国山東省の雲門山石窟像（隋時代）にも見出されていて、両者の関係を一考してみることも必要であろう。光背の刻技はかなり巧緻なものといえる。

次に左脇侍の半跏思惟像はこの種の形姿としては典型的なもので、総高一・六六メートルとなる。上半身裸形で、左足を踏下げ、屈した右足を左手でおさえ、右手の指を頬に寄せる。足下には中尊と同じような反花座を踏む。光背は中尊のそれに類する宝珠形であるが、同縁の火焔はなくて、その代りに円形の圏帯部をつくっている。頭上には三山形の装飾的な宝冠をいただく。この像も柔和な微笑を浮かべ、彫技も全体的におだやかである。

右脇侍の菩薩立像は総高一・〇七メートルで、両手を屈臂し、正面において掌の上下に宝珠をさしはさむようにして捧げる。形姿は左右相称の直立形であり、面相は他の二像と同様に微笑をおびた慈顔といえる。宝冠は三山冠の形式をとる。台座が反花座であることは他の二像と同様である。光背は上記半跏思惟像とほぼ同じものであり、両像が脇侍的に扱われていることが知られる。両像の大きさも、形姿に違いがあるとはいえ、視覚的に不自然は感じないであろう。

この磨崖像が三尊一具をあらわすものとすれば、左右対称を無視して、半跏思惟形という破格とも思われる像を左脇に配したことに何か重要な意味があるもののようである。しかも朝鮮では半跏思惟形をもって弥勒菩薩をあらわすことが多いとすれば、この場合、主尊の如来立像は弥勒如来そのものと見るのが最も適切ではないかと思われる。これまでに見て来たところからいっても、月城・中原の両磨崖像にお

いて、如来形と半跏思惟形との弥勒像が密接不離の関係で表現されていたことを想起すべきであろう。さらに右脇の菩薩立像も弥勒に随侍讃仰する菩薩像と見ることができるであろう。つまりこの三尊像は、弥勒浄土の主役三体を象徴的に一具としたものであり、いいかえれば群像形式をとった月城・中原などの磨崖像を簡略化したという見方もできるのではなかろうか。その意味で、瑞山磨崖像を弥勒浄土磨崖像の一バリエイションと見なすことも不当ではないように思う。製作年代は七世紀前半で、所在からいっても百済系統の石像であるが、よくまとまった彫法に見られるように、すでに隋様の影響を受けているとされる。

五、むすび

以上簡略ではあるが、朝鮮に現存する半跏思惟像を伴う三つの磨崖像をとりあげ、それらが何をあらわすものか、主題の点を中心に私考を述べて来た。その結果、これらの磨崖像が弥勒信仰を基盤としていること、しかも特記すべきは、上生信仰と下生信仰とを密接に結びつけた表現をとっていることなどが指摘された。とくにそれらの造形的な表現は三者三様であって、月城磨崖像が構図的に説明風あるいは情景風であるのに対して、中原磨崖像は群像表現に一種の遠近法と囲遶形式をとりいれている。そして最後の瑞山磨崖像はむしろ象徴的な要素の方が強くなり、主尊となる弥勒如来立像の左脇に弥勒菩薩半跏思惟像、右脇に随侍讃仰衆を代表する菩薩立像を対称的に配置して、三尊形式として弥勒信仰の実態を示そうとしたものであろう。百済や新羅に弥勒信仰が盛んであったために、その造像面においてもバラエティに富み、興味ある展開を示したことはいうまでもない。ことに半跏思惟像は仏教美術史全体の上でまだ究明の余地を多く残すものであり、そのためにも、このような弥勒浄土磨崖像のなかに出る半跏思惟像からの探究は、今後独尊像と並んで一層進めて行くべき分野であると思われる。

註

(1) 刻銘に「敬造阿弥陀弥□□□」とあり、下から三字目が勒ではないかと見られている。

(2) この石像は、新羅善徳女王一三年（六四四）に造立された生義寺弥勒像に当るとされている。

(3) 本章に記したことの詳細は、拙稿「半跏思惟像の系譜」（『大和の古寺』一所収、一九八二年、岩波書店）を参照。

(4) 黄寿永「断石山神仙寺石窟磨崖像」（『韓国仏像の研究』所収）一九七八年、同朋舎

(5) 黄寿永「新羅半跏思惟石像」（同上）

(6) 鄭永鎬「中原鳳凰里磨崖半跏像と佛・菩薩群」（『考古美術』一四六・

一四七）一九八〇年

（7）毛利久「奈良時代の興福寺と造像」（『奈良の寺』一一所収）一九七六年、岩波書店

（8）同上

（9）黄寿永「瑞山百済磨崖三尊仏像」（『韓国仏像の研究』所収）一九七八年、同朋舎

（付記）図1・2は黄寿永教授、図4・6は鄭永鎬教授の御配慮による。